



宮垣 知樹

法学部法律学科4回生

いま日本外交史を学ぶ、それが自分の成長の糧

私は、法学部の中で政治系のコースに所属しています。小学生の頃から、政治社会問題に興味関心があり、問題の根幹やその背景などを知りたいと考えていました。高校時代には、日本と近隣諸国との関係が領土問題や歴史認識の違いで悪化している状況を見て、政治への関心が一層強くなりました。そして、大学での勉強を通して、具体的に悪化した関係を修復していく外交という方法に関心を抱くようになりました。これが、私が龍谷大学法学部で政治を学ぼうと考えた原点です。

2回生の後期からは、そういった問題関心に合ったゼミに所属し、中島琢磨先生のご教授の下で日本外交史を研究しています。当初は、日本外交の基礎知識を身に着けるために専門書の講読を通して、明治から戦後までの日本が国際社会との関わりを模索してきた歴史を学び、知識の幅を広げました。現在では、公開された外交文書を自分自身で読み、当時の実際の外交と、新聞での報じられ方との違いや、国内状況が外交にどのように影響をもたらしていたのかを考察し、ゼミの中で議論しています。

具体的には、今年の1月に公開された、1983年の中曽根首相とレーガン大統領による日米会談の記録などを資料としています。日米貿易摩擦が問題となった当時、レーガン大統領が中曽根首相にオレンジ・牛肉の輸入を強く要求する一方で、中曽根首相も大統領に対して日本としての主張を述べ、日米が対等に議論している場面を目にしました。現在、

一般的に報道等で伝えられる、日米関係は米国従属という認識が、当時の外交文書を読むことで覆り、一次資料を研究したからこそ事実を知ることができたと感じました。

このように一連のゼミ学習で、専門書を通して学んでいた日本外交史を、自分で資料から議論することができるまでに、学びを成長させています。私は、大学では興味関心を追究していくことが、自身の学びの幅を広げ、成長させる糧になると実感しています。自分の興味関心の追究という大学での学びの経験を活かして、今後は社会人として成長し続けたいと考えています。

中島琢磨ゼミナールにて

